

NEWS LETTER

No.101

2019 Dec.

日本がん予防学会 Japanese Association for Cancer Prevention(JACP)

CONTENTS

- 01 日本がん予防学会の理事長二期目就任のご挨拶
(石川 秀樹)
- 02 二期目の副理事長に就任して
(祖父江友孝)
- 03 総務の役割
(岡田 太)
- 03 「がんの個別化予防」に注目して
(高山 哲治)
- 04 理事継続(がん予防認定・研修委員会担当)のご挨拶
(武藤 倫弘)
- 04 日本がん予防学会に求められるもの
(豊國 伸哉)
- 05 日本がん予防学会「がん予防臨床研究推進委員会」
(鈴木 秀和)
- 06 疫学分野の理事を拝命して
(溝上 哲也)
- 06 日本がん予防学会活動の新展開
(高橋 智)
- 07 私のがん予防
(高橋 智)
- 08 編集後記
(石川 秀樹)

日本がん予防学会の 理事長二期目就任のご挨拶



石川 秀樹

京都府立医科大学分子標的予防医学 特任教授

いつも日本がん予防学会の運営にご支援、ご協力を頂き、ありがとうございます。

本来ならば今年の6月に開催しました評議員会までに理事選挙を行い、新しい理事および理事長を決めていなければならなかったのですが、私のミスにより理事選挙ができておらず、評議員会にて8月に理事選挙を行うまでは、旧理事が理事を継続することになりました。今回の不手際を心よりお詫び申し上げます。

8月に理事選挙が行われ、理事8人枠に8人の立候補があり、石川秀樹、岡田太先生、鈴木秀和先生、祖父江友孝先生、高山哲治先生、豊國伸哉先生、溝上哲也先生、武藤倫弘先生の新理事が確定しました。今回の理事選挙では、専門分野ごとの定員枠は設定しませんでした。これまで基礎系4人、疫学系2人、臨床系2人の理事でしたが、新理事は基礎系3人、疫学系2人、臨床系3人になりました。そして京都で開催

された日本癌学会にあわせて9月26日に開催された新理事会において、互選により新理事長は石川秀樹、新副理事長は祖父江友孝先生が選ばれました。

そして、各理事の担当委員会は下記のように決まりました。

総務・広報委員会：岡田太先生

ホームページからの情報発信は、学会にとって重要な活動ですが、これまであまり活用していなかったと思われます。岡田先生が担当となり、学会のホームページを大幅にリニューアルすることになりました。

編集委員会：高山哲治先生

本学会は、とても充実したニューズレターが長く続いています。これからも新鮮な会員の声の聞けるニューズレターを発刊していきたいと考えており、高山先生にその担当をお願いしました。また、本学会は、学会誌がありませんので、商業誌や他の学術雑誌などと連携し、学会公認の発信媒体を持つことができないかも、検討して頂き

たいと考えています。

がん予防認定・研修委員会：武藤倫弘先生

2年前から、武藤先生にはご尽力頂き、認定制度やセミナーの体制基盤を整えて頂きました。かなり形になりましたので、今後も担当理事として活躍して頂く事になりました。また、若林敬二先生に担当して頂いています「スマートミール コンソーシアム」の担当理事も兼務して頂くことになりました。

基礎的がん予防委員会：豊國伸哉先生

がん予防に関する基礎的な情報をまとめて発信しているホームページなどは、これまで日本にはなかったように思います。そこで、ホームページ担当の岡田先生とも連携して、豊國先生が担当として、基礎系のがん予防研究の発展に寄与する情報提供をして頂くことになりました。

がん予防臨床研究推進委員会：鈴木秀和先生

2年前から鈴木先生が担当として、

がん予防に関係する臨床試験を支援する委員会を立ち上げましたが、これまでに数回の会議を行い、かなり有意義なディスカッションをすることができました。残念ながら、まだ、AMEDなどの予算獲得には到達していませんが、これからも本学会の重要な活動の一つとして、継続したいと考えています。引き続き、鈴木先生に、本委員会を担当して頂くことに致しました。

疫学的がん予防委員会：溝上哲也先生

新しく理事になられました溝上先生には、疫学の情報発信を担当して頂くことにしました。

監事は、これまで中釜齊先生と樋野興夫先生にお願いしていました。中釜先生には再任をお願いしご快諾頂きました。樋野先生は定年になりますので、名古屋市立大学の高橋智先生にお願いしてご快諾頂きました。

監事再任の中釜先生以外の理事、監事の先生方には、このニュースレターに、就任の抱負などを記して頂きました。

私は、2年前に本学会の理事長を拝命しました。目標の一つである学会の一般社団法人化は実現し、また、2年前に掲げた「がんの化学予防研究の推進・支援」、「国民へのがん予防啓発」の2つの目標についても、理事や評議員、会員の先生方のご支援、ご協力のおかげで、「日本がん予防学会認定がん予防エキスパート制度」を発足し、毎年セミナーを実施することができ、がん予防臨床試験の支援についても、数回の会議を開催することができました。

しかし、この2年間でがん予防の知識が広く周知されたり、がん予防研究が盛んになったりしたとは思えません。まだまだ力不足ではございますが、日本におけるがん予防の研究と実践のために、これからもさらに努力していきたいと考えております。

本学会の活動につきまして、今後とも会員諸兄の積極的なご支援・ご協力を心からお願い申し上げます。

二期目の副理事長に就任して



祖父江友孝

大阪大学大学院医学系研究科環境医学

本年度から二期目の副理事長を承りました。石川理事長を補佐する立場でありながら、一期目はほとんど貢献らしいことができませんでした。今期はもう少し貢献度を上げられるように、努力する所存です。

さて、2019年4月に厚労省から「がん研究10か年戦略」の推進に関する報告書(中間評価)(https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000147227_00001.html)が出ていますが、研究費

を申請する際の参考になる文書です。2014年からの「がん研究10か年戦略」には8つの柱があり、その中1つに「がんの予防法や早期発見手法に関する研究」があります。この柱に関して上記の中間報告では、「がん予防については、これまで多くの発がん要因が明らかとなってきたものの、引き続き、未知の発がん要因を探索していくとともに、これまでに判明した発がんリスクに加え、ゲノム情報から新たに得られ

た発がんリスク等を統合的に解析することで、予防においてもより精緻な個別化を進めることが重要である。しかし、リスクを認識するのみにとどまり、予防を実践しなければがん罹患率の減少を達成することは困難であることから、介入試験などを通じて科学的根拠のある予防の実践法を開発し普及させていかなければならない。」と記述されています。本学会の役割としては、「がんの化学予防研究の推進・支援」のみならず、「個別化されたがん予防実践法の開発普及のための介入研究の推進・支援」を視野に入れることが、社会的には求められていると思います。がん研究の基礎、臨床、疫学に係る異分野の研究者が連携することで、こうした取り組みを実現すべく、学会に貢献していきたいと思っておりますので、二期目もよろしく申し上げます。

総務の役割 Roles of General Affairs



岡田 太
鳥取大学医学部病態生化学分野
Futoshi Okada (fuokada@tottori-u.ac.jp)

石川秀樹理事長の強力なリーダーシップのもと、二期目の総務担当理事を担当させて頂きました。総務・広報委員会の取り纏めを引き続き仰せつかりました。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

一期目の懸案事項でありました学会ホームページの改訂は、遅ればせながら刷新のための具体的な検討を踏まえ、業者との打合せの段階に入りました。全体のホームページ構想・デザインは、若い研究者を閲覧対象に改訂し

ます。併せて、当学会の誇る各委員会事業のウィンドウを新設しまして、誰もが使い易いスタイルにします。中でも「認定がん予防エキスパート制度」、「がん予防のための基礎ならびに臨床研究の相談・公開窓口」や「最新がん予防研究情報」などの設置を計画中です。また、若手研究者育成の一環としまして、大型研究費の研究班等を組織する際の情報提供や、当学会から班員を推薦できるような仕組みも理事長ならびに理事を中心に思案中です。上記はい

ずれも新たな日本がん予防学会の在り方にも波及する事業と捉えております。

日本がん予防学会が直面している喫緊の課題は、会員数と学会参加者の減少であり、特に若手研究者の入会対策が急務と考えています。当学会の次世代を担う研究者が自ら積極的に赴く学会を目指し、そのためには若手中心の企画や、奨励賞・発表賞やディスカッサー賞等の新設も皆さんと一緒に検討して参りたいと思います。

学会活動と学会ホームページは、主として研究成果の情報・意見交換の最前線となります。これに加えて社会に対する提言（研究成果の社会還元）を発信することも求められております。このような要望に応えつつ、さらに次世代の会員が積極的に参加し、成長してゆくことで日本がん予防学会の更なる発展に繋がるよう尽力して参ります。引き続きご意見を賜りますようお願い申し上げます。

「がんの個別化予防」に 注目して Individualized cancer prevention



高山 哲治
徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器内科学 教授
Tetsuji Takayama (takayama@tokushima-u.ac.jp)

この度 当学会の理事に選出頂きました徳島大学の高山と申します。がん予防は大変重要な領域ですが、本邦では諸外国に比べて必ずしも十分に「がん予防」の研究や臨床試験が進められていないと思います。その一つの要因として、基本的に本邦では「がん予防薬」が認めていない、ということがあるかと思えます。その点において、本邦でヘリコバクター・ピロリの除菌治療を承認されたというのは大きな意義があると思います。私は消化器内科医ですので、今後ますます除菌により胃がんの発症率が減少することを期待しています。一方、私はがんの内視鏡診

断・治療のみならず、がんの薬物療法にも従事し、臨床腫瘍学会などの学会活動を行っています。最近のトピックスは、やはり何と言ってもゲノム医療だと思います。個々人のがんのゲノム異常を調べて、それに適した治療薬を探すといういわゆる「がんパネル検査」を国が承認してくれた、というのは大変大きなことだと思います。私の患者さんも、これまで少なからず「がんパネル検査」を受け、この中には特徴的な遺伝子異常が同定され、有効な薬剤が見つかった患者さんもいます。他方、最近、遺伝性乳癌卵巣癌症候群をはじめとした Germline 変異のマルチ遺伝

子検査が可能になり、多くの遺伝性発癌症候群が同定されるようになりました。私の患者さんにも、家族性大腸がん、家族性胃がん、家族性膵がんなどの胚細胞性変異の見つかった患者さんがいます。その場合、本人のみならず家族の人の遺伝子を調べ、陽性であればサーベイランスを行う必要があります。このように、近い将来、個々人に応じた「がんの個別化予防」という考え方も必要になってくるように思います。これらの患者や家族では、特定の臓器の発癌リスクが高いことから、その予防が必要になります。数年前から「がんの個別化治療」の重要性が良く言われていますが、「がんの個別化予防」も求められる時代になり、がん予防学会でも個別化予防を発展させていければと思います。

最後に、私はニュースレターの作成に携わることになりました。各編集委員の先生や執筆者の先生には大変お手数をおかけいたしますが、何卒よろしくようお願い申し上げます。

理事継続（がん予防認定・研修委員会担当）のご挨拶

Letter from a renew executive board member

武藤 倫弘

国立研究開発法人国立がん研究センター
社会と健康研究センター 予防研究部
Michihiro Mutoh (mimutoh@ncc.go.jp)



まず、理事に選んで頂いた評議員の先生方、また関係する皆様に感謝申し上げます。3年前に、石川理事長より「がん予防認定・研修委員会担当理事」として「がん予防セミナー」の実施と、「日本がん予防学会認定 がん予防エキスパート」の認定制度を開始する任務を仰せつかりました。ゆっくりとではありましたが、がん予防セミナーは3回実施でき、認定制度におきましても認定証の受付と交付にまでたどり着くことができました。これからもこれから2つの事業を継続することにより、i) がんの予防 (cancer prevention) の社会実践 (がん予防学会会則第2章

第3条 ii) がん予防の正確な知見の普及 (第2章第4条(2)) を達成させたいと考えております。改めて考えてみますと、「がん予防」の大切さを訴えるオピニオンリーダーは多くても、正確ながん予防教育を受けている医療関係者、行政者などのごくわずかであることにより、がん予防の啓蒙・知識の普及を行う実行部隊の数が少ないのが現状と思われます。そこで、がん予防の啓蒙・知識の普及が正確な情報をもとに行われているかを保証する制度を確立することにより、「国民へのがん予防啓蒙」を担う人数を増やし、社会で活躍して頂くことを目指してい

る本事業の重要性はこれから増していくと考えられます。本学会はがん予防の学術的なエビデンスを集約し、正確な情報提供を行うことのできる学会ですので、社会のがん予防を牽引する本学会への期待はさらに大きくなると思われます。今後は、ホームページの改定に伴い、認定証の申請もウェブ上でできる様にし、エキスパートの先生が市民公開講座などで参考にできるスライド集もウェブ上に公開 (エキスパート認定者のみアクセス可) することにより、正確ながん予防の啓蒙・知識の普及に繋げたいと思っています。また、指導内容をまとめたテキストの作成も必要です。運営委員会の皆様と本学会員の意見を集約しながらじっくりと作っていく所存です。最後に、立ち上げ期間から安定的運営の期間にスムーズに移行できるようにこれからの3年という任期を使い、皆様のご指導の元、猛進する所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本がん予防学会に求められるもの

What is expected to the Japanese Association for Cancer Prevention?

豊國 伸哉

名古屋大学大学院医学系研究科 生体反応病理学 教授
Shinya Toyokuni (toyokuni@med.nagoya-u.ac.jp)



1994年に設立され、今年25周年を迎えた日本がん予防学会に求められるものは何であろうか。今年の夏季におきましては、日本がん予防学会の理事としてご承認いただき、心より感謝申し上げます。理事会の中では「基礎的がん予防委員会」を担当させていただくことになりました。本委員会に関しましては、ホームページを担当される岡田太理事と緊密な関係を取りながら、このニュースレターとは異なる角度からがん予防に関する最新知見をみ

なさまにお届けしたいと考えており、現在その案を練っているところです。関連主要雑誌のwatchによるがんの原因や予防に関する厳選された客観的データのeditorialを提供すると同時に、基礎的がん予防研究の窓口も設置する予定です。

さて、ここからはがん予防に関する私見を述べさせていただこうと思います。結核を代表とする主要な感染症の克服後、1981年から「がん」が日本における死亡原因の第1位になっていま

す。現実には、日本において一生の間に男性は2人に1人が、女性は3人に1人が何らかのがんに罹患しています。年間新たに100万人が罹患し(1秒に2人)、37万人が死亡しています(1.5秒に1人)。がん全体の5年生存率は62%になりました。日本においては寿命が延伸していることも関連していますが、がん死亡者はまだまだ増えています。米国において大腸直腸癌による死亡が現在減りつつあるのは有名な事実ですが、最近の分析ではその寄与の80%程度が、年金受給と絡めた政策的50歳時における下部内視鏡スクリーニングである、ということも分かっています。がんリスクとしての直接・間接喫煙の問題なども含め、現在わかっていることだけからも政策的にはできることが多いのではないのでしょうか。

一方、最近私は、「がん」は、明らかになりリスクがわかっているものと、リス

クがあまりわかっていないものに分類する必要を感じています。リスクがわかっているものの代表は、喫煙と肺扁平上皮癌・小細胞癌や喉頭癌、あるいはアスベスト曝露と中皮腫・肺癌でしょう。その一方で、膀胱癌、卵巣癌などいまだリスクの端緒がつかめず、しかも予後の悪いがんがあります。基礎的な研究は後者にもっと注力すべきであると思います。目先の経済的なことを考慮しすぎるあまり、治療や治療耐性の研究だけに集中しすぎるのは得策

ではないと思われます。また、私は発がんの根本となっている変異の原因として、私たちが鉄や酸素を恒常的に使用していることの副作用の側面があることも考慮する必要があると考えています。がん予防には、治療の前段階としては、「発症の予防」と「早期発見」の2つの異なる側面があります。前者に寄与するためには、がんの原因をさらに突き詰めて考えていく必要があるでしょう。

参考文献

Toyokuni S, *et al.* Iron and thiol redox signaling in cancer: An exquisite balance to escape ferroptosis. *Free Radic Biol Med.* 2017; 108: 610-626.
Zauber AG. The impact of screening on colorectal cancer mortality and incidence - Has it really made a difference? *Dig Dis Sci.* 2015; 60: 681-691.

日本がん予防学会「がん予防臨床研究推進委員会」



鈴木 秀和

東海大学医学部内科学系消化器内科学領域教授
一社) 日本がん予防学会理事

わが国において、科学的根拠に基づく、がん予防を、効果的かつタイムリーに実現するためには、がんの予防に関連するエビデンスをさらに収集し、可能な限り予防的介入により、がんを予防する提言を発信することが不可欠です。私は、2017年度から日本がん予防学会の理事として、臨床的がん予防小委員会の担当をしてきました。本委員会では、日本人のがん予防研究からのエビデンス創出を強化するため、特に予防介入シーズ育成基盤を新たに構築するため、「がん予防トライアル支援委員会」を発足しました。「がん予防トライアル支援委員会」は、石川秀樹理事長、武藤倫弘理事の他に、東京大

学の松山裕先生(統計)、国立成育医療研究センターの掛江直子先生(倫理、法律)、国立がん研究センターの山本精一郎先生(統計、疫学)に委員として加わっていただき、全国から応募された、がん予防シーズの研究計画をコンセプトシートの前段階から吟味し、POC試験(biomarker-driven介入試験)までの育成を行い、研究実施への橋渡しすることを目標にしています。つまり、ハイリスク群をターゲットとした予防介入シーズの研究計画の段階からコンサルテーションを行う仕組みが、日本がん予防学会を母体に開始されたのです。2018年度からは、国立がん研究センター研究開発費「国内外研

究連携基盤の積極的活用によるがんリスク評価及び予防ガイドライン提言に関する研究(30-A-15)」(主任研究者:井上真奈美先生、国立がん研究センター社会と健康研究センター予防研究部)の分担研究者として、このがん予防トライアル支援委員会を運営展開しています。先日、2019年9月26日の京都での日本がん予防学会の新理事会にて、私が、引き続き、この臨床的がん予防小委員会を担当することになりましたが、これを機に委員会の名称を、「がん予防臨床試験推進委員会」に改称し、重厚な育成基盤の構築の方向に舵をきり、特に、予防的介入でがん予防を実現する臨床試験シーズ育成を支援していくこととなりました。昨今、がん予防臨床試験、とくに介入型予防試験は、個々の施設や個々の研究者で展開することは難しいと思われるので、日本がん予防学会の会員の皆様には、積極的に委員会にご提案をあげていただきたく存じます。個々のプロジェクトを学会全体で推進していこうと思いますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

ご寄附の御礼

日本がん予防学会では2019年度、以下の企業からご寄附を頂戴致しました。ここに厚く御礼申し上げます。

(株)アミノアップ
大鵬薬品工業(株)

(株)玄米酵素
東京サラヤ(株)

スマイル産業(株)
ヤクルト本社中央研究所

疫学分野の理事を拝命して What can I do for the JAPS?

溝上 哲也
国立国際医療研究センター臨床研究センター
疫学・予防研究部 部長
Tetsuya Mizoue (mizoue@hosp.ncgm.go.jp)



このたび疫学分野の理事を拝命しました国立国際医療研究センターの溝上です。私は産業医科大学卒業後、吉村健清教授の下、がん登録や胃がん研究(JACC スタディ等)に関わりました。九州大学では古野純典教授の下、大腸がんの症例対照研究に携わり、ビタミンDやカルシウムとの関連を調べました。そのころ国立がん研究センターが主導する「がん予防研究班」(通称)の分担研究者に加えていただき、大腸がん予防に関する日本のエビデンスをとりまとめる機会を得ました。国立国際医療研究センターに移ってからは、津金昌一郎先生のご高配によりJPHCスタディで糖尿病研究に取り組む中で、大腸がんと糖尿病の予防要因の類似性に気がきました。スリランカでは、小林博先生が開発された学校保健プログラムにより、子どもたちが主役となって親や地域住民の健康改善に取り組んでいることに魅了されました。疫学をバックグラウンドとする私の役

割は、信頼のおけるがん予防情報を国民に周知する学会活動を推進することと認識しております。私が研究に携わってきた大腸がんの予防に関しては、エビデンスに裏付けされた生活習慣要因は多いのですが、そのことを正確に知っている人は保健医療従事者を含めて少ないようにみうけられます。知識と行動のギャップ以前の、科学的知識と社会的認知のギャップです。このギャップを埋めるに、本学会ホームページでがん予防に関する国内外の情報を紹介するにあたり、どうしたら社会的認知度を高められるかを考えたいと思います。

日本では「がん予防研究班」のメタアナリシスによりエビデンスが蓄積され、それらは日本人向けのがん予防ガイドラインに反映されています。大腸がんを例にとると、飲酒、肥満、運動については日本人における確実性の高いエビデンスがあると研究班で判定されました。一方、国内の研究が少ない食

要因などについては国際的なガイドラインが拠り所になります。世界がん研究基金と米国がん研究所の報告書では、乳製品、食物繊維を含む食品、全粒穀類について、これらの摂取が大腸がんのリスクを低下させることを支持する確実性の高いエビデンスがあるとしています。大腸がんは日本人女性のがん死因の第1位ですが、女性には肥満者や多量飲酒者が多くはないため、これらの食要因が予防上のポイントになります。集団特性を踏まえ、がん予防情報の出し方を工夫するとよいかもかもしれません。

がん予防に関わる社会的な動向にも注目したいところです。知人が産業医を務める企業では、オリンピック開催にむけスワンスワン運動(2020年の2を白鳥に見立てて)を展開し、喫煙率の大幅な低下に成功しています。「健康経営」や働き方改革の流れで、仕事中の座位時間を減らすため、立位作業にも対応した机を導入した企業もあります。学会として、こうしたがん予防に関する社会環境の整備事例をいくつか紹介してはどうでしょう。

以上、個人的な意見を申し上げましたが、諸先生方に相談しながら、まずは学会ホームページでのがん予防情報の紹介から取り組んでまいりたいと存じます。ご支援のほど、よろしく願いいたします。

日本がん予防学会活動の新展開 New development of activities of the Japanese Association for Cancer Prevention

高橋 智
名古屋市立大学大学院医学研究科実験病態病理学 教授
Satoru Takahashi (sattak@med.nagoya-cu.ac.jp)



この度、監事を拝命しました名古屋市立大学の高橋智です。今後は学会員の方々の意見を尊重しながら学会の安定的運営に向けて尽力する所存であり

ますので、御協力の程よろしく申し上げます。

医療技術の目覚ましい進歩により早期がんの検出が可能となるとともに国

民の高齢化もあり、がん患者は増加の一途を辿っています。がん治療は抗癌剤にかわって副作用の少ないと考えられる分子標的治療薬の使用が主流となりつつあり、がん治療の高額化が目立っています。厚生労働省が発表している国民医療費の動向を見ると、2000年度に約30兆円であったものが2014年度には40兆円を突破し、2018年度には42兆6000億円にまで増加しています。今後もさらなる高齢化に伴って国民医療費は膨らむことが予想されているのが現状です。

2007年から施行されているがん対

策基本法では、その施策の1つとしてがん予防の推進が謳われており、その意味からも日本がん予防学会は非常に重要な立ち位置にあるものと認識しています。日本がん予防学会の責務として、がん予防研究の推進を図ることはもちろんですが、がん予防に関わる知識を一般市民に周知していく必要があります。がんの二次予防である検診に

よるがんの早期発見だけでなく、一次予防である生活習慣や食生活に改善による発がん要因を回避あるいは化学予防剤の確立に注力する必要があります。今年度から学会認定がん予防エキスパート制度が発足しますが、これを機にこの制度を十分に活用して小・中学校、高校あるいは市民公開講座等においてがん予防に関わる情報提供、啓

蒙活動に積極的に取り組むことで今までとは異なる次元での学会活動に移行できるのではないかと思います。また、このような活動は日本がん予防学会の存在を広く認識してもらう良い機会となり、学会員のリクルートにもつながるのではないかと期待しています。

私のがん予防 ～研究データに基づいたがん予防の実践～ Practice of evidence-based cancer prevention

高橋 智
名古屋立大学大学院医学研究科実験病態病理学 教授
Satoru Takahashi (sattak@med.nagoya-cu.ac.jp)

私が担当している医学研究科における病理学講義、大学院講義あるいは看護学校の病理学講義では「腫瘍」を教えています。その一連の講義の中で「がんの原因」について必ず説明しています。皆さんがよくご存知の Harvard Report on Cancer Prevention¹⁾ のデータに基いて、受動喫煙を含めタバコを避け、食習慣に気をつけて肥満にならないようにすれば、少なくともがんの2/3は予防できると学生に説明しています。また、WCRF-AICR が公開している The Third Expert Report²⁾ の記載事項を紹介することでがん予防に関わる情報を伝えるようにしています。当然のことながら私自身もこれらを実践し、がん予防を心がけています(最近は少しメタボが気になっていますが…)

私たちの研究室で実施している発がん研究、がん化学予防研究において論文発表した発がん性がある物質、疑われる物質については、その物質の摂取あるいはそれらが多く含まれる食材の摂取は極力避けるようにし、がん化学

予防候補物質が多く含まれる食材をなるべく多く摂るようにしています。がん化学予防に関連したドラッグリポジショニング研究も実施しており、特に前立腺癌に対するアンギオテンシンII受容体(AT1受容体)拮抗薬(Angiotensin II receptor blocker, ARB)およびアンギオテンシンII受容体(AT2受容体)作動薬の化学予防効果を論文発表しています^{3,4)}。私自身、少し高血圧気味なのでARB、特に研究の中で一番効果のあったカンデサルタンを服用するようにしています。最近では膀胱がん予防についてのドラッグリポジショニング研究を行っており、(まだ論文発表には至っていませんが)抗アレルギー薬が膀胱がんを抑制することを明らかにしています。実験では3種類の抗アレルギー薬を用いましたが、そのうちの1つは私が服用している抗アレルギー薬を選択しました。偶然にもその薬剤ががん予防効果を示したことで、今まではただ漫然と服用していた抗アレルギー薬が非常にありがたい薬に思えるようになり、

膀胱がん予防を期待しながら毎日拝むような気持ちで服用しています。

私たちが公表しているがん予防研究成果は実験動物におけるデータであるため実際にヒトに対して効果があるとは断言できませんが、私たちが出したデータには自信を持ち実際にはがん予防につながることを信じて、自ら日常生活の中でがん予防を実践しているところです。

文献

1. Harvard Report on Cancer Prevention Volume 1: Causes of human cancer. Cancer Causes Control, 7 Suppl 1: S3-59, 1996.
2. World Cancer Research Fund & American Institute for Cancer Research. Diet, nutrition, physical activity and cancer: a global perspective. The Third Expert Report, 2018.
3. Takahashi S, et al. Therapeutic targeting of angiotensin II receptor type I to regulate androgen receptor in prostate cancer. Prostate, 72: 1559-1572, 2012.
4. Ito Y, Takahashi S, et al. Chemopreventive effects of angiotensin II receptor type 2 agonist on prostate carcinogenesis by the down-regulation of the androgen receptor. Oncotarget, 9: 13859-13869, 2018.

がん予防学術大会 2020 米子 開催案内

会期：2020年5月15日(金)～16日(土)

会場：米子コンベンションセンター BIG SHIP (鳥取県米子市末広町 294 TEL 0859-35-8111)

会長：岡田 太 先生 (鳥取大学医学部教授)

プログラム概要

合同シンポジウム 「がん予防・疫学研究への布石」

座長：武藤 倫弘 先生 (国立がん研究センター)

戸塚 ゆ加里 先生 (国立がん研究センター研究所)

武藤 倫弘 先生 (国立がん研究センター社会と健康研究センター化学予防研究室 室長/京都府立医科大学大学院医学研究科分子標的予防医学 教授)

「『がん予防』の定義を改めて考え、布石とする」

鰐淵 英機 先生 (大阪市立大学大学院医学研究科分子病理学 教授)

「職業曝露によるがん発生の要因解明と予防研究への展開」

戸塚 ゆ加里 先生 (国立がん研究センター研究所発がん・予防研究分野 ユニット長)

「集学的アプローチによるがんの要因解明と予防研究への展望」

足立 淳 先生 (医薬基盤・健康・栄養研究所プロテオームリサーチプロジェクト プロジェクトリーダー)

「プロテオミクスを駆使したがん最適医療への挑戦」

シンポジウム 1 「癌疫学・分子疫学研究の新展開」

座長：松田 知成 先生 (京都大学)

松尾恵太郎 先生 (愛知県がんセンター研究所)

松田 浩一 先生 (東京大学新領域創成科学研究科 教授)

「疾患バイオバンクと分子疫学研究」

新村 和也 先生 (浜松医科大学腫瘍病理学 准教授)

「DNA グリコシラーゼ遺伝子 variant 型蛋白質の機能評価とがん」

堅田 親利 先生 (北里大学医学部消化器内科学 講師)

「食道癌の発癌メカニズムと予防に関するコホート研究—JEC試験の最新知見—」

恒松 雄太 先生 (静岡県立大学薬学部生薬学分野 講師)

「コリバクチン産生菌制御に基づく大腸発がん予防法樹立への挑戦」

シンポジウム 2 「がん転移の予防戦略」

座長：落谷 孝広 先生 (東京医科大学)

尾崎 充彦 先生 (鳥取大学)

落谷 孝広 先生 (東京医科大学細胞外小胞創薬研究講座 教授)

「細胞外小胞によるがんの骨転移メカニズムの解明と創薬」

尾崎 充彦 先生 (鳥取大学医学部実験病理学 准教授)

「血管内皮に焦点を当てた転移予防戦略」

田中 美和 先生 (がん研究会がん研究所発がん研究部 研究員)

「がんの血管形成を制御するエピゲノム特性」

シンポジウム 3 「がん予防への新概念」

座長：豊國 伸哉 先生 (名古屋大学)

今井 俊夫 先生 (国立がん研究センター研究所)

久郷 裕之 先生 (鳥取大学染色体工学研究センター センター長)

「染色体工学技術を利用した革新的癌研究—基礎から応用への展開—」

筆宝 義隆 先生 (千葉県がんセンター研究所発がん制御研究部 部長)

「オルガノイドを用いた ex vivo 発がんモデルの確立とがん予防への応用」

林 利憲 先生 (広島大学両生類研究センター 教授)

「p53 遺伝子に着目したイモリのがん抵抗性の研究」

豊國 伸哉 先生 (名古屋大学大学院医学系研究科生体反応病理学 教授)

「がん予防におけるフェロトーシスの意義」

参加費：

事前登録 一般 7,000 円、大学院生 4,000 円、学部学生 無料

当日登録 一般 8,000 円、大学院生 5,000 円、学部学生 無料

情報交換会：5月15日(金)18:00～20:00

レストラン「ルポルト」 米子コンベンションホール ホール棟1階

会費：事前登録 (一般・大学院生・学部学生) 5,000 円

当日登録 (一般・大学院生・学部学生) 6,000 円

各種委員会：

日本がん予防学会理事会

5月15日(金)11:35-12:50 (会議棟3階 第2会議室)

日本がん予防学会評議員会

5月16日(土)12:00-12:50 (会議棟3階 第2会議室)

日本がん予防学会総会

5月16日(土)13:00-13:30 (ホール棟2階 小ホール)

化学予防臨床試験会議

5月15日(金)14:45-15:25 (会議棟3階 第2会議室)

認定がん予防エキスパート制度実行委員会

5月16日(土)11:10-11:50 (会議棟3階 第2会議室)

〈編集後記〉

The Editor's postscript

昨年台風や地震で、日本各地は大きな被害を受けましたが、今年も「これまでに経験のしたことのないような」というフレーズのついた災害が、立て続けに発生しています。被災されました地域におかれましては心よりお見舞い申し上げます。

さて、2年前から理事選挙が行われるようになり、一般社団法人化してからは初めての理事選挙が終わり、新体制が整いました。

今号のニュースレターでは、新理事、新監事の先生方に、それぞれの抱負を書いて頂きました。今年から2年間、この体制で本学会は活動していきま

す。がん予防の研究の発展、知識の普及のために本学会が担うべき役割はとて大きいと考えています。

これからも会員の皆様のご支援、ご協力を頂きたくお願い申し上げます。

石川秀樹

Hideki Ishikawa
(cancer@gol.com)

発行

Japanese Association for Cancer Prevention
一般社団法人日本がん予防学会

理事長

石川 秀樹 (京都府立医科大学特任教授)

会長

小林 正伸 (北海道医療大学教授)

編集委員長

小林 正伸

編集委員 (※本号担当者)

※石川 秀樹

豊國 伸哉

細川真澄男

鈴木 秀和

永田 知里

武藤 倫弘

(50音順)

事務局

札幌市中央区大通西6 北海道医師会館内

TEL:011-241-4550 FAX:011-222-1526

E-mail:master@jacp.info

URL:http://jacp.info/

問い合わせ、入会のご希望などは事務局へ